
明日に見たもの。

SERIAL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日に見たもの。

【Nコード】

N2675F

【作者名】

SERIAL

【あらすじ】

勉強はいまいち、しかしサッカーの実力は全国トップレベル。そんな将来有望な亮太に忍び寄るものは……。酒、タバコ、シンナーに溺れていた少年の、苦悩と再生の物語。

始まり（前書き）

あくまでフィクションです。

始まり

まばゆいほどの光が、

亮太の身体を包み込んだ。

久々に感じるこの感覚、

まだ微かに懐かしく感じられるのが嬉しかった。

後ろを振り返ると、

約一年半過ごしてきた冷たいコンクリートの建物が、

まるでそこだけ時間が止まっているかのように、

ただ漠然と存在している。

ここで過ごした時間は、

亮太にとって、

とても長いものだった。

少年院。

まだ16歳の少年に、

二度と帰ってきたくはない故郷ができてしまった。

今からおよそ3年前、

中学生だった亮太はサッカー部に所属していた。

勉強の方はいまいちだったが、

サッカーの実力は誰もが認めるほどで、

1年生ながら県内どころか、

全国でもトップレベルの選手だった。

校内でも人気者で、

学校初のプロサッカー選手誕生の期待も大きかった。

そんな亮太を誰よりも誇りに思っていたのは、彼の両親だった。亮

太のためならと、

近所の空き地をサッカーの練習場にしたり、

サッカー名門私立高校に進学させる準備をしたりと、

決して裕福ではなかった家庭ながら、
亮太にかかる期待は相当なものだった。

ある日、

サッカー部の先輩が亮太を呼び出した。

その先輩は日頃から後輩に優しく、

とても慕われていた。

亮太はその先輩から、

一枚のビニール袋を手渡された。

そのビニール袋の口は輪ゴムできつく縛られていたが、中には何も入っていないようだった。

「先輩、なんですかこれ？」

「一回その中の空気吸ってみろ。」

亮太は訳も分からず、

ビニール袋の輪ゴムを外し、

言われたとおり、

中の空気を吸ってみた。

すると、

今まで感じたことのないような感覚が亮太を襲った。

体の疲れが抜けていくような、

なんともいえない不思議な感覚だった。

しかし、

その感覚がたまらなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2675f/>

明日に見たもの。

2010年10月10日04時48分発行